

「オネエ所長の調査ファイル」 # 3 0

山崎浩治

「あたしが共感を覚えるひと、それは越路吹雪よ。宝塚歌劇団の男役トップスターだった彼女は『男の格好して愛を歌うのは嫌』と言って宝塚を去ったといわれてる。あたしも彼女と同じ気持ちで女装を始めたわけ。あたしたち、どこか似た者同士なのよね」

「全国のコーちゃんファンを敵に回すぞ！」

「でも、あたしにとって女装は、マッチ売りの少女、が凍える街角でマッチを擦り、そのマッチの火が燃えている間だけ見ていられる夢でしかない。火が消えると待っているのは厳しい現実。マッチ売りの少女のようなこのあたしを温めてくれる人はいないのかしら」

「それは難しいと思うぞ。おっさんはマッチ売りの少女というより、見た目、赤ずきんのオオカミだからな」

「金沢プライベート・リサーチ」のオネエ所長、市山とツンデレ調査員の沙織が金沢市内の飲食店で張り込み中だ。この日の市山はフリルのトップスにレースのスカートで女装している。

今回の依頼人は15年前に離婚した先妻との間にもうけた娘の遙(18歳)から「将来、教師になりたいので大学の入学資金100万円を養育費として援助してほしい」と手紙が届いた会社員・賢(46歳)である。賢は会社の同僚との不倫がばれて妻と別居、話し合いは親権をめぐる紛糾し、最終的に妻に親権を渡す代わりに、慰謝料・養育費は支払わないという条件で協議離婚が成立した。その後、不倫相手の女性と再婚した賢には中学生と小学生の息子が2人いる。離婚後、娘とは一度も会っていないという。

市山と沙織は「金を要求してきたのは、元妻の入れ知恵ではないか。元妻と娘がどんな生活をしているか調べてほしい」と依頼を受け、遙がアルバイトしている店に赴いたのだ。端正な顔立ちの遙は高校3年生で、平日に3～4日、週末はコンビニのアルバイトも掛け持ちしている。きびきびと接客する遙を眺めながら沙織が言った。

「あの子に大学進学する気があるとは思えないけどなあ」

「どうしてそう思うの？」

「彼女が通っているのは金沢市内でも有数の進学校よ。こんなにバイトしてたら受験勉強する時間ないじゃない」

「経済的に困っているのかもしれない」

「持ってるスマホは最新型だし、着ている私服もオシャレだったわ。きっと遊ぶお金ほしさに依頼人に手紙を出したのよ」

◇ ◇

「離婚してから15年も経って養育費を要求してくるなんて、どうかしてますよ。しかも100万なんて大金、おいそれと出せるわけがありません」

数日後、調査報告を聞くため「金沢プライベート・リサーチ」にやってきた賢が吐き棄てると、市山が穏やかにたしなめた。

「元妻と別れても娘さんとあなたは法的に親子のままよ。養育費の支払いは免れないわ」

「ずっと音信不通だったんですよ！」

「養育費は通常、離婚の手続きの途中で話し合われるけど、離婚後、必要になった時点で支払いを求めることもできるの」

賢がうんざりした顔で言った。

「娘はバイト三昧で、受験勉強している様子はないでしょ？ 遊ぶために行く大学でも援助しなければいけないんですかね」

「ところが調べてみると、どうやらそうじゃないみたい」

離婚後、シングルマザーとして遙を育ててきた元妻は4年前まで宅配ドライバーの仕事をしてきたが、体調を崩して退職。いまはスーパーのレジ打ちと宅配の仕分けのダブルワークをしている。月収は扶養手当込みで20万円に満たない。元妻の収入では生活するのがやっとなので、遙がアルバイトをして家計を補っているらしい。

「母子家庭で大学進学をするのは本当に大変よ」

「奨学金を使えばいいんですよ。娘が志望する教師なら、大学の奨学金は返済免除になるでしょう」

「あなた一体いつの時代の話をしているの？ そんなの20世紀に廃止されているわ」

「薄情に聞こえるかもしれませんが、うちにはこれから教育費がかかってくるせがれが2人いるんですよ。別れた女房の娘を援助している余裕など、ないですね」

賢が言い切った。

◇ ◇

テストで良い点数を取ると母が喜んでくれたので、勉強が好きだった。幼いころ、母を笑顔にするのが自分の役目だと思っていたのだ。小学校高学年になると塾に通う同級生が増えてきたが、宅配ドライバーとして毎日夜遅くまで働く母に「塾に行かせて」とは言えない。「塾に行っている同級生に負けてたまるか」と学校から配られるプリントを暗記するほど読み込んで勉強した。

そのかいあって高校入学時は学年でトップクラスの成績。けれど学年が進むごとに降下していく。高1から始めたアルバイトに追われて勉強時間が激減、しかもバイト疲れで授業中、居眠りしてしまうこともたびたびあったからだ。それに伴って志望校だった地元国立大への進学は難しくなり、私大に切り替えざるを得なくなる。

大学の学費は奨学金で捻出する予定だったが、調べてみると入学時に必要な費用の納付期限は合格発表の数週間後であることが分かった。少なくとも入学金は、大学入学後に支給される奨学金でまかなうことができない。そこで銀行の教育ローンを借りようとしたものの、母に返済能力がないと判断され、審査に落ちてしまう。公共料金の支払いを何度か滞納していたことが理由だったようだ。

進学費用を貯めるつもりで始めたバイト代は小遣いやスマホ、修学旅行の積み立て、昼食費、

教科書代などでほとんど消えた。スマホを解約しようと思ったこともあるが、高校にはLINEのグループがいくつもあって、スマホがないと学校生活に支障を来す。バイトの給料日前には手持ちのお金が底をつき、昼食を抜くこともあった。トイレに行くふりをして、校舎の隅で午後の授業が始まるのを待つ。空腹に耐えかねて水道水を飲んでしのいだ時は「ここは日本かよ」と自分につっこんで、笑ったこともある。そんな遙にとって、まかないが出る飲食店のアルバイトは救世主のような存在だった。

先生になって、私のように困っている子どもの味方になりたい。その夢をかなえるために、大学に進学する必要があった。でもこれ以上、母に経済的な負担を強いるのは心苦しく、金沢市内にいる祖母は新聞配達をして乏しい年金を補う生活で、とても援助を求めることなどできない。途方に暮れていた時、思い出したのが父だった。

遙は家族旅行に行ったことがない。何かと金のかかるスポーツ少年団や部活をやるのも我慢した。自分でアルバイトをして稼ぐようになるまで、新しい洋服や本を買ったことがなかった。もの心ついた時には母一人子一人の暮らし。うちに父親がいれば、と何度考えたか知れない。一度くらい、父親らしいことをしてもらってもバチは当たらないだろう。そう考えて父に手紙を書いたのだ。

◇ ◇

「あなたが娘さんを援助したくないというなら、方法が2つあるわ」

「それは何ですか」賢が身を乗り出した。

「親に養育費を請求するのは、子どもとして当然の権利よ。けれど、あなたに支払うだけの経済力がなければ、無い袖は振れないというのも現実。ましてやあなたの場合、裁判や調停で養育費の金額を決めたわけではないから、仮に支払わなくても強制執行されることはない」

「なるほど」賢が安堵の息を漏らす。

「もっとも先方が調停を申し立てたら、娘さんが20歳になるまで少なくとも月1～2万円の養育費は覚悟しなきゃいけないけどね」

「月1～2万でも痛いな。もう一つの方法はなんですか？」

「あまりお勧めしたくない奥の手よ。養育費を払う条件として、娘さんの親権を求めるの。元妻が拒否したら親権者変更調停を起こせばいいわ。娘さんを大学に進学させる経済力がないのなら、親権を渡せ。そうすれば娘を大学に進学させる、と申し出るの」

「ちょ、ちょっと待って下さい！ そんなことして、元妻が親権をこっちに寄越してきたらどうなるんですか？」

声を裏返させた賢に、市山が言った。

「娘さんの生活すべての面倒をあなたが見ることになるわね」

「いや、だから、私にはせがれが2人いるんですって！ とてもそんな余裕など……」

市山が賢の言葉をさえぎった。

「元妻はずっと一人で娘さんを育ててきたのよ。その親権を手放すとは思えない。娘さんだって

、いまさらあなたに親権者になってほしいとは考えないでしょう」

「つまり、要求を取り下げさせるために、ハツタリをかますわけですね！」

そう言う賢は何か考える表情になった。今後の対応を検討しているのだろう。虚空をにらむ賢に、市山が問いかけた。

「あなた、娘さんの顔を最後に見たのはいつ？」

「離婚した15年前です。娘はまだ3歳でした」

「一度娘さんに会ってみなさい。決断するのはそれからでも遅くないわ」

◇ ◇

翌年春、遙は第一志望だった県内の私大に合格、入学費用と初年度の学費は賢が負担した。その金は賢が定期預金を解約して工面したという。

「どういう心境の変化だったの？」市山が電話で報告してきた賢に問うと、苦笑まじりの答えが返ってきた。

「血のつながった実の娘から『助けて』と言われて断れる親がいると思いますか。あれから遙が働いている店に行ってみたんですよ、客として。でも遙は私に気付きませんでした。顔も覚えていない親に金の無心をしなきゃいけなかった遙の気持ちを思ったら、なんだか泣けてきましてね。店内で号泣している客に、遙はドン引きしてましたけど」

15年前、不倫せずに離婚しなかったら、どんな人生を送っていたのだろう。赤ん坊や3歳のころの遙がよみがえると、七五三、小学校の入学式や運動会、卒業式、クリスマス、花火大会……遙とともに送るはずだった日々が脳裏を駆け巡ったという。

「そばにいたら、もっとしてやれたことはあったと思います。遙には悪いことをしました」

「彼女と話をしたの？」

「いいえ。ちょっと親らしいことをしたからって恩着せがましいことをする気にはなれませんよ。私にはまだまだ手のかかるせがれもいるし、これから頑張っって働きます」

すがすがしい声でそう語った賢が電話を切った。遙はいま、大学に通いながらアルバイトに精を出す学生生活を送っている。ある日、市山と沙織がバイト先に足を運ぶと、ひたむきに働く遙の姿があった。その姿を目で追いながら、市山がつぶやく。

「彼女は毎日のようにバイトをして生活費や学費を稼いでいるそうよ。若者の貧困は目に見えにくい。彼女は一見すると何不自由なく暮らしているいまどきの学生だけど、あたしにはあの子が寒さに震える、マッチ売りの少女、に見えて仕方がないの。彼女にとっての大学生活が、マッチを擦って見る夢、にならないことを祈るわ」

メンズスーツにポマードをたっぷり使ったリーゼントの髪型、キリリとしたアイメイクで決めている市山に、沙織が不思議そうに聞いた。

「おっさん、今日は珍しく女装じゃないんだな」

「これは宝塚歌劇団の男役をイメージしているの。あたし的には女装のつもり。えへ」

「ややこしい女装をするんじゃない！」